

個人に合った縁組のプロセスを選べるのが理想的であると言われている (Demick 1993, Grotevant et al. 1994, Romph 1993, Mendenhall et al. 1996, Lee 1994)。そのプロセスのタイプを大きく分けると、クローズドアダプション、オープンアダプション、とセミオープンアダプションがある (Smith 1997, Lee 1994)。

1. クローズドアダプション・オープンアダプション・セミオープンアダプション

クローズドアダプションは現在日本の殆どの養子縁組斡旋機関がおこなっているもので、秘密厳守と匿名性を強調する (Gritter 1989)。クローズドアダプションでは、養子であることを子どもに伝える、つまり真実告知をするが、養親家庭と産みの親間には一切コミュニケーションがない (Smith 1997)。アメリカでもこのタイプが1970年代まで主流であった。

クローズドアダプションを支持する研究者は精神分析学を基盤とした考えで、いったん子どもを放棄した産みの親が干渉するのは養親と子どもの絆づくりに有害であると主張する (Kraft et al. 1985)。

オープンアダプションのオープン度には相当な幅があり、その幅は養親と産みの親が選択するものであるが、随時お互いに相談して調節する。オープンアダプションは、簡単にいうと、養親と産みの親が直接にコミュニケーションをとり、その関係を維持するタイプと定義づけられる (Chapman et al. 1987)。ここでいうコミュニケーションの例として、養子縁組成立前では、産みの親が養親選択過程に参加する、産みの親と養親が対面するなどがあげられる。養子縁組成立後では、手紙や写真の交換、産みの親が子どもの誕生日に贈り物をする、電話で話す、直接会う、などである。言うまでもなく、産みの親と養親間の情報も実名で交換する (Gritter 1997)。

オープンアダプションは、法律や養子縁組機関が促したからではなく、産みの親と養子の願望でどんどん広がり、現在、すでにアメリカではカナダ、ニュージーランド、イギリスと同様に、社会に認められて定着している。アメリカの児童福祉同盟 (Child Welfare League of America) をは

じめ、公私立機関により標準化され、オープンアダプションは子どもの利益のためにさらに強く推薦されている (Child Welfare League of America 1995)。そしてアメリカでは、一般市民の過半数がオープンアダプションに賛成しているという調査結果もでている (Romph 1993)。

また、オープンアダプションのなかでも、オープン度の低いタイプで、セミオープンアダプションがある。セミオープンアダプションの定義は、研究者によって違ったものもあるが、今回の調査研究においては、次の2要素を含むものをセミオープンアダプションと定義する。

- 1) 養親選択過程に産みの親が参加する。
- 2) 養親と産みの親が直接コミュニケーションをとらず、養子縁組機関やソーシャルワーカーのような第三者を通してコミュニケーションを保つ (McRoy et al. 1988, Smith 1997, Lee 1994)。

すでに日本でも、セミオープンアダプションの形で養子縁組サービスを提供している機関がある。産みの親は子どもにとってどんな事情があれ大事な人であること、産みの親がいろいろな理由があって、最終的に、子どもの幸せを思い、自分には幸せにすることができないから養子にしたこと、産みの親のその時の状況をかながみての、この決心は決して自分本位のものではないこと、また、子どもには、産みの親と養親のいずれもかけがえのない親であり、法律上はどうであれ、地理的に離れているにしろ、この2組の親の存在は子どもの心的発達過程に不可欠な存在であることを理念としている。

東京の第二社会福祉事業団「環の会」が乳児のセミオープンアダプションを実施している。環の会は、出産後に育児ができそうもなく困っている産みの親へのカウンセリングと、その結果養子縁組以外に方法がないと本人が意思決定した場合に養子縁組斡旋をしている民間団体である (星野 1997)。環の会の活動状況は目覚ましく、1992年設立以来、1997年11月末までに、58名の乳児に養子縁組サービスを提供しており、39組の養子縁組が成立した。また、1997年度のみをみても、多種の電話相談は509件あり、その内、産みの親からの養子縁組希望が前年に比べ倍増した。また、同年